



岐阜県教育懇話会
〒509-0108
各務原市須衛町4-291
(株)後藤解卵場内
Tel. 058-370-1510
口座番号 00800-3-5390

綱 領

- 一、われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する。
- 一、われわれは教養と品位の向上につとめ、真理愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。
- 一、われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

はそれ以前から慣習として定着していた法規範にはそれなりの存在意義があるはずであり、これを一挙に投げ捨ててしまうのではなく、再評価してそのよい部分を継承すべきではないかと訴えた。

【巻頭言】 日本国憲法

“八月十五日革命説”の 破綻と今後の課題

岐阜県教育懇話会 後藤章嘉

日本国憲法はGHQによる占領政策で誕生したことは、今や常識であるが、その経過は次の通りである。

昭和二十年十月、幣原内閣はGHQの強い勧告によって憲法改正を指示され、憲法問題調査委員会（委員長松本内務大臣）を政府内に設置した。政府の改正試案は認められず、GHQがみずからの英文の改正草案（マツカサ―草案）を急遽和訳したものを政府原案として発表した。新憲法制定は手続き上、大日本帝国憲法を改正する形式をとり、改正案は

衆議院と貴族院で修正可決されたのち、日本国憲法として昭和二十一年十一月三日に公布された。

このように占領下という国民の政治的自由のない中で誕生した新憲法に正統性はあるのか、今なお議論があるが、それを正統であるとして戦後の憲法論の主流となったのは、東京帝国大学法学部の宮沢俊義教授の“八月十五日革命説”である。

その説によれば「国体」は昭和二十年八月のポツダム宣言受諾によって、革命的に変わったとする。占領軍の強制力により、超越的に「国民主権」「基本的人権」「三権分立」という新理念が与えられ、それまでの「天皇主権」は革命的に変更されて無くなったと言っているのである。

しかし、宮沢教授は昭和十七年の『憲法略説』で「大日本帝国は万世

一系の天皇永遠にこれを統治し給う。これわが肇国以来の統治体制であり、これをわが国家における固有かつ不變な統治体原理とする。」と強調していたのである。それをいとも簡単に変えた理由を、革命的な変更であるから、自分の憲法学説が変化してもやむを得ないと弁明した。

これに異を唱えたのが同僚の尾高朝雄教授であった。安易に見解を変更する宮沢教授の憲法解釈を批判し、一朝一夕に変更されることのない国民の慣習的規範（ノモス）があると主張した。外国の特異な社会モデルから生まれた「国民主権」「基本的人権」という理念を無批判に継受するならば、いずれわが国の慣習的規範と齟齬をきたす事態となり、長い目で見て国家運営は行きづまるだろうと考えた。日本は明治維新以来、あるいは

両者を比較してどちらに真実性があるかは言うまでも無い。宮沢説は占領憲法を正当化せんがための理屈に過ぎなかったのではないか。

今や日本国憲法は綻び、尾高教授の指摘が現実となっている。最も重要な第一章の天皇は元首から象徴に変わること事態とのずれが生じ、今回の譲位の問題でも表面化した。また生活の基盤である家族や地域は個人主義の浸透で崩壊し、我が国の遺俗、美風は失われつつある。国家存続の基本である国防も九条では間に合わないことが明白となった。

憲法の改正論議がようやく始まった。これまでの憲法の常識を見直し、独立自尊の気概を持って、歴史ある日本に相応しい憲法を打ち立てねばならない。改正論議の進展を促し、その早期実現を期したい。

〈時論〉

「アメリカの道德教育の動向」

キャラクターエデュケーションと
PBIS

皇學館大学准教授 渡邊 毅

来年度より小学校で道德科が完全実施になり、実効性のある道德教育が求められるようになった。

それにはアメリカの道德教育—キャラクターエデュケーションが参考になると思われる。理由はそれを実施したところ子供達の学力が向上したという調査結果がいくつか出ていることと、ある中高一貫校の資料によれば、それを始める前は一万千件の問題行動があったのが、実施後は三千件も減ったという顕著な効果が認められたからである。

1、キャラクターエデュケーション
登場の経緯

一九六〇年代から八〇年代のアメリカでは、道德性は個人的な価値判断であるという考え方であった。そこで価値の明確化という授業—子供の内面の価値が明確になるよう支援する授業がよく行われた。

またモラルジレンマという授業もはやった。これはAという道德的価値とBという道德的価値を対立させると葛藤が生じる。それを子供達に議論をさせるというものである。

しかし、結果として道德心が身につかなかった。それどころか、学校で暴力行為が頻繁に起き、麻薬が蔓延するなど、子供達の問題行動がいたるところで発生して、最も危険な場所は学校だとさえ言われた。

これを受けてアメリカの教育学者ウイリアム・キルパトリックは「アメリカ人は道德教育の実験に失敗した」と言った。またモラルジレンマを開発したローレンス・コールバーグは、「道德教育の一部では価値の注入ということを行わなければならない」と最終的に結論づけた。この学者はもともと価値の伝達（インカレーション）さえも批判的であったが、失敗を目の当たりにして、主張を変えたのである。

アメリカの道德教育は八〇年代から九〇年代にかけて大きく変わった。キャラクターエデュケーションが登場し、今日では主流となっている。

2、キャラクターエデュケーションとは何か

①道德的価値を教える
男性が化粧をしてピアスをするのは反対だと言う人がおれば問題ないという人もいる。こういう一般の価値は考え方に違いがあってもいい。しかし、道德的価値はだれもが良くいと考えることで、朝「おはようございます」と挨拶をしたら、けし

らんとする人はいない。

②良い習慣を形成する

アリストテレスは「それは小さな違いではない。・私たちがとても若いときから、ある習慣、他の習慣を持つかどうか・それが大きな違い、そしてすべての違いを創るのだ。」と習慣形成の大切さを述べているが、その考えに由来している。

③行為で示す

良いことは行為として表すことによつて初めて善意は相手に伝わり、という考え方である。

3、キャラクターエデュケーション
の実際

(1) 道德的価値を教える工夫
アメリカの学校では次のような価値を大事にしている。

- ①尊敬、②責任感、③忍耐強さ、
- ④奉仕、⑤自己統制、⑥正直さ、
- ⑦共感、⑧勇気、⑨安全

その中で特に大切にされているのが①尊敬と②責任感で、あとはこの中から一つくらいを選んで、学校で特に大事にする核的価値（徳目）として学校内に掲示をしている。

行事でもキャラクターエデュケーションが行われている。毎月テーマになる道德的価値を決めていて、今月は「責任感」、来月は「尊敬」という具合で、その月の行事はその道德的価値とからめてやっている。

キャラクターエデュケーションの授業は大体三〇分ぐらいで行う。例えば「リスペクト（尊敬）」を伝えるものは何か考えさせる。見えるものでは姿勢、おじぎ、真剣な表情などがあること、聞こえるものならば話が終わった後の拍手、挨拶の声、お礼の言葉などがそれを伝えるものとして子供達に気付かせる。

アメリカでも読み物資料を使った道德授業はあるが、違うのは発問の仕方である。例えばオリンピックで活躍した選手の話を使った授業をする時、日本では主人公が「困難なとき、どんな気持ちだったでしょうか」と心情を聞くことが多い。アメリカでは主人公が「優勝するためにいかに忍耐したか」と、道德的価値の言葉を入れて聞いている。

(2) いじめ問題に対応する授業

日本では読み物を読ませ、被害者、加害者、傍観者の立場からいじめを考えさせることが多い。アメリカでは実際に起きたいじめ事件を検討するという授業をやっている。

例えば試合でミスをして負け、メンバーからいじめを受けたという実話を使って、「互いに思いやる精神が大切だ」という一般的な話合いをしてから、被害生徒の努力のプロセスを重視すべきだとか、被害生徒を教師や仲間が守るべきだとか、被害

生徒がうまくプレーできるように支援すべきだといった具体的な解決策を授業のなかで出していく。

(3) 偉人伝教材の活用

キャラクターエデュケーション研究の第一人者ケヴィン・ライアンは「人格教育の非常に強力な源泉である模範的例は、我々が伝えようと思うものの一つである。特に文学や歴史、偉人の伝記を教えることは、学校で継続して行うべきことの一つである。青年に私達自身の人生だけでなく、世界や歴史上の人物について記されたよい人生を提供することが必要である。」と語っており、偉人の伝記は重視されている。

(4) 自制心を養うための指導

自分の気持ちを制御できるように、自制心を養う指導を行っている。気持ちネガティブからポジティブまで五つのゾーンに別け、今自分の気持ちはどういう状況にあるのか、子供たち自身で考え、表現させる。また「私の中にある私のゾーン」という感情を表すノートを持たせていて、少し気分が乗らないときは絵を描き、ネガティブな時は本を読むというように気持ちに対処する方法を書いて実践させている。

(5) グロースマインドセットを導入した指導

これはポジティブに物事を考えさ

せる指導で「自分の成長は経験や努力によって、向上できる」という考え方を持たせている。

例えば「できないと言わず、できると考えなさい」と奨励したり、「これくらいかかないと言わず、何が欠けているの？ 問いなさい」という風に問いかけたりして指導する。

(6) 月(テーマ)毎に生徒を表彰

学校では月ごとに人格的に優れた子供を表彰し、写真をとって廊下の一番よく見えるところに掲示している。月のテーマごとに生徒を表彰するので、毎月生徒が変わる。

4. PBIS成立の経緯

アメリカでは一九九〇年代から二〇〇〇年代には、学校が大変荒れていた。そこで「ゼロトランス」(寛容さなし)という非常に厳しい指導が行われた。学校毎に親と生徒のためのハンドブックがあり、細かい決まりが書いてあって徹底的にやっていた。その結果、随分と収まってきたが、弊害が出てきた。普通の子供にはいいが発達障害の子には逆効果だというのである。そこで八〇年代後半からPBISが登場してきた。

最初は行動障害児の社会性の発達を促すために開発された指導・支援の方法として出てきた。それがPBISの指導は行動障害の子供たちだけでなく、一般の子供たちにも有効

だということが分かってきた。

現在ではゼロトランス方式を一部残しつつ、PBISの指導が全米的に実施されている。

PBISとは肯定的な行動的介入と支援という意味で、何がポジティブかと言うと四つの意味がある。

①新しい問題行動が生じないように、そして既存の問題行動が再発しないように予防する。

②問題行動の替わりになる、より望ましい社会技能を教える。

③子供の成功と達成を重視する。

④子供が望ましい行動をしているところを日頃からとらえて承認する。

5. PBISの実際

(1) 「期待される行動」を教える

まず各学校で先生方が話し合い、「期待される行動」表(いろいろな場所での望ましい行動が書いてある)を作成し、子供達に示していく。そこには道徳的価値に対して望ましい行動例があげられているので、道徳教育と生徒指導の接続が見られる。

(2) 教える

ポジティブな行動を教えるやりかたは言わば山本五十六方式である。①まず言葉で説明して、②教師が模範を示し、③子供にやってみさせ、④うまくできたら誉め、⑤うまくできなかつたら、どこがうまくないか説明してもらう一度やらせ、⑥期待さ

れる行動を自分ですらすらできるまで繰り返して練習させる。

(3) 称賛カードで「期待される行動」を強化

子供が良い行動をしても言葉だけでは忘れることがある。子供にとってもあまり印象に残らない。そこでカードを使ってどの観点でよかつたのかを示して誉めるのである。

(4) 問題行動への対処的介入

問題行動を起こすと、まずその子供にカードを使ってどの徳目に反したかを示す。そのカードが月に三枚たまると、親にお知らせが行く。親はそれを見て話をし、サインをして返す。学校で最終的に指導をする

アメリカの生徒指導の特徴は次にとどのような行動をしなければいけないかを中心に行う。

6. 米国の道徳教育から見えてくるわが国の道徳教育の課題と展望

(1) 我が国の核心的価値は、戦前は教育勅語があつた。戦後はないままに来たが、それでよいのか。

(2) 考え議論する道徳が言われているが、その前に価値を教えることをしなくてもよいか。

(3) 行動に結びつく道徳教育にするには、習慣化ということが必要。

(4) 道徳教育と生徒指導を接続する必要がある。

(これは今夏の教育研究大会記念講演の要旨です。文責・編集部)

—日本教師会—
第五七回教育研究大会 報告

八月六・七日、大阪市のアウイーナ大阪においてみだしの研究会が、大阪教師会主管で開催された。

主題は「道徳科の授業のあり方と課題」で、講演と実践発表により、四〇余名の参加者が研修を深めた。開会式では、国歌斉唱に続いて慶野会長の挨拶があり「日本の道徳の惨状を考えるに、国家の根幹をなす憲法から欺瞞がある。九条がその最たるものだ。安倍首相は三項を入れて自衛隊を明記しようとしているが、欺瞞を重ねるものだ。憲法は正直に条文を書くべきだ」と、道徳再建は憲法を正すことが必要と話された。大阪教師会中曾会長は「大阪は長らく道徳の授業が行われてこなかつた。そのため学力が低下し、学級崩壊も多発しているのではないかと考えている。



教師は道徳の授業ができれば、教科指導の中でも人間教育ができる。来年度からの道徳の教科化に向けて研修を深めたい。」と挨拶された。

来賓は全国教職関係神職協議会からの寶来茉佐子副会長と大阪府議の吉田利幸氏の紹介があった。

記念講演は「アメリカの道徳教育の動向」キャラクターエデュケーションとPBIS」と題して、皇學館大学准教授渡邊毅先生が話をされた。(本号2〜3頁に要旨を掲載)

実践発表は幼小中の教諭四名により、二〇分の発表と一〇分の質疑応答で行われた。

幼児教育ではPKIDS学園の山西寿幸先生が「異年齢児クラスにおける複数担任制能動的学習法の実践報告と毎日の孝教音読活動」について発表された。

PKIDS学園は幼児から中学生までを対象にして、一貫して日本の文化、自然観やこころの育成を目指し「身につく教育」をモットーに運営している。その具体的な指導場面として「朝の活動」「孝教の音読活動」「複数担任制能動的学習」を説明された。特に「教育勅語の朗読」が話題になっていた事に触れながら、「孝教」の朗読は内容も大切だが、一日の始まりに姿勢を正して声を出すこととよさを強調された。また小さな

子が立派に暗誦する姿に親さんも感動し、子供達を誉めるようになる。それが今の親には足りていない事として「親子共育」もされていた。

小学校は大阪市立南恩加島小学校の丸岡慎弥教諭が「日々の授業で子どもの心を鍛える」というテーマで発表があった。

先生は道徳授業を学級経営の要として実践されている。小学校は多くの教科の教材研究に当たらねばならず、道徳授業の準備に時間を割けないという実態の中、横山駿也氏の「道徳読み」という指導法に巡り会い、それを中心に実践をされていた。発表では会場の参加者を生徒に見立てて実際の道徳資料をどのように読み取ることが「道徳読み」なのかを体験的に解説された。その読み方は資料に含まれる道徳的な内容を拾い取る読み方であり、少しの訓練で身につくものであった。メリットはどんな教材でも応用ができ、子供たちも道徳を自ら学ぶ習慣が身につくということであった。忙しい学校にあって短時間に授業の準備ができて、効果が上がるという「夢のような」指導法に会場は大いに盛り上がった。

中学校は山口大学附属光中学校の藤永啓吾教諭で、「道徳科の評価は子どもと保護者の心を豊かにする」と題して、道徳科における評価のあり

方についての提案があった。

道徳科は「人間的な魅力を探す時間」と定義し、授業では主人公のどんな魅力について考えるのかを明確にすることが大切とされた。生徒が魅力を見つけ、人間としての生き方についての考えを深めるのだが、指導者はそこから生徒の成長を受けとめ、認め励ますことが評価であると言われた。具体的には年間を通じての学習過程やワークシート、授業での発言、授業前後での発言等を総合的に評価し、それを生徒に返すことで生徒は成長を実感し、保護者の道徳性の育みにもつながるとされた。

最後は大阪浪速高等学校・中学校の松尾大輔教諭が「若手教員の挑戦—愛から学ぶ国の道徳教育」をテーマに発表された。挑戦の中心は①偉人教育②いじめ対策③神道教育で、特に①と②の実践を報告された。①は「人は人を浴びて人間になる」原理に基づき、歴史や公民の教科書に出てくる人物や銅像・御祭神になっているような人物をとりあげ、多様な価値を引き出すようにしている。

②は「いじめに立ち向かう」道徳教育の成果を発表された。道徳授業でいじめの事例をもとに自分たちで何ができるかを考えさせた。浪速高・中学校ならではの神道に基づく指導の実践報告であった。(編集部)